

男と女の不完全マニユアル

# 火星の男と女

薄井ゆづじ



株式会社ウイアックス

火星の男と女

40	39	38	37	36	35	34	33	32	31
手 品	捕 獲	林 檜	読 書	窓 辺	冷 凍	仮 面	携 帯	船 出	時 計

## 時計

公園のベンチに、いつもすわっている女がいる。私の部屋の窓からそのベンチがよく見えるから気がついただけで、特に女に関心を持ったわけではない。

図書館へ本を返却しに行った帰り道、公園を横切って、ベンチにすわるその女の前を通った。

「見てたでしょう」と女が言う。

私に声をかけたとは思わなかったので通り過ぎようとする女は、

「逃げるわけね」と言った。

振り返って、私は女を凝視した。近くでまじまじと見るのは、はじめてだった。小柄で、ふくよかな顔立ちをしていた。年齢はわからない。幼女のようにもあり、老女のようにもあつた。年齢を放棄しているようにも見えた。

「私に言ったのかな」と訊いた。

「ほかに誰がいるというの」平然と、まるでパン屋でパンを注文するような口調で言った。「あなたよ」

「失礼ですけど」私はもう一度、女を見た。「何とおっしゃいましたか、さつき」

「見てたでしょう、あたしのこと。毎日あの窓から」

私の住む部屋の窓のほうを指差した。その指は枯れ木のようであり、乳児の指のようでもあつた。

「あの部屋からは、この公園しか見えないんだ。べつにきみを見ていたわけじゃない。正直に言えば、いつもここにすわっていると思っただけで、きみだけを見ていたわけじゃない」

「そう」

パン屋でパンを買って釣り銭をもらうときのように、女の口調には何の感情も含まれていなかった。怒っているのでも悲しんでいるのでもない女性を見るのは、それがはじめてだった。たいていの場合、女性はそのどちらかのはずだ。

「それで、私に何か？」

女は何も言わない。いつもそうしているというように、遠い風景を見ている。

なるほど、と私は思う。声をかけられて立ち止まった私に落ち度があったのだ。すべての女から声をかけられて、すべての場所で立ち止まっていたら、私は前へは進めない。かわる必要などない。

無視して歩き出そうとすると女は、

「やっぱり逃げるわけね」と言った。

私は女を無視した。何も言わず、そこから立ち去った。背後から追いかけてくるのではないかという恐怖はあったが、そんなことにはならなかった。

それから数日、何事もなく過ぎた。私はできるだけ窓の外を見ないようにしていた。この部屋に住んだ理由は、景色が素晴らしいからだ、妙な因縁をつけられるくらいなら、景色など見なくても過ごせる。

そう思っていたある日、ドアをノックする音がして、あの女が訪ねてきた。

「無視するわけね」女は言った。

どうしようか、と私は思った。何も言わずにドアを閉める方法もある。しかしそうすれば女は、何度も何度

でもドアをノックするだろうし、警察の力を借りてもドアをこじ開けて入ってくるに違いなかった。

私は観念して女を部屋に入れた。

「それで」紅茶を女の前に置いて私は言った。「きみは何を言いに来たのかな」

「返して欲しいの」

「何を」

「あたしの時間を」

「時間？ きみの時間を奪ったりした覚えはないんだけど」

「その窓から」と枯れ木のような幼児のような指で窓を差した。「あたしを見ていたでしょう。見られていたあいだ、あたしは、あなたに時間を吸い取られたわけ。わかるでしょう。その時間を返していただきたいの。お願いだから返して」

女は泣きはじめた。こういう場面にいつだったか、過去にも遭遇したような気がした。というより、女たちにはいつも、こういう局面に立たされてきた。私が何もしていなくても、女のほうは何かをされたと訴えるのだ。

「きみは結局、何をして欲しいのかな。時間を、どう返せばいいのか、それを教えてくれないか」

理不尽だと思いつつも、そう訊いた。まともな会話ではないことは承知の上だ。

「こうしているあいだにも、あたしは年老いていくわけ。無理なことを言うつもりはないの。時計を買ってあげたいだけ」

「時計なら、あそこにある」

私は部屋にあった古い掛け時計を差した。女はそれをじっと見詰めると、

薄井ゆうじ（うすいゆうじ）

1949年茨城県生まれ。イラストレーター、デザイン会社経営を経て、『残像少年』で第51回小説現代新人賞を受賞。『樹の上の草魚』で第15回吉川英治文学新人賞を受賞。主な著書は、『天使猫のいる部屋』『くじらの降る森』『12の星の物語』など。





チョット見文庫

男と女の不完全マニュアル  
火星の男と女

発売日 2012年6月15日

著者 薄井ゆうじ

編集 栗田孝子

装丁 2010

企画 林秀和 西門直 大西健之 梶川悦子 志田淳

発行者 小川巧次

発行所 株式会社 **ヴィアックス**

〒164-8677

東京都中野区弥生町2-8-15

TEL 03-3299-6009

<http://www.viax.co.jp/>

無断転載・複製を禁じます。

© Yuji Usui 2012

この作品は2000年11月から2009年4月、月刊『アップルタウン』誌に連載したものに加筆修正したものです。